

テキスト作成と情報の新旧ステータス ー日本語テキストの作成過程に見られる情報の新旧の影響ー

ニアムチャラーン・ニーラチャー

キーワード: テキスト作成、情報構造、情報の新旧、パラフレーズ調査

要旨

本論文は、テキストを作成する段階に、情報構造の一つの概念である情報の新旧がどのように関わるかを調べた。パラフレーズ調査によって得た日本語テキストに見られる統語的現象のうち、省略現象、指示表現・代名詞の利用と、文の主題・項構造の選択が情報の新旧から影響を受けていると考えられた。それらの関連を分析した結果、聞き手の知識による新旧のステータス、談話モデルにおける新旧のステータスの他に、先行文脈との結びつきの有無もテキスト作成時の表現の選択に影響していることが明確になった。

1. はじめに

談話を作成する際、送り手は、持っている情報をそのまま表現するのではなく、頭の中でそれぞれの情報を関係付けたり配列したりした後に言語化している。その言語の文法や書き方のスタイルが談話の言語形式を定めるが、非言語的要因である情報構造も談話における表現の現れ方に影響すると考えられる。その情報構造には、情報の新旧という概念が含まれ、ある言語における文法項目や文内の要素の現れ方などを説明するためによく用いられている (Birner & Ward 1998, Du Bois 1987, Halliday and Hasan 1976, 久野 1982など)。本論文では、書き言葉であるテキストを作成する際、情報の新旧がどのようにテキスト内の表現の選択に影響するかを探る。

しかし、情報の新旧は未だ不明瞭な概念である。多くの研究は新情報・旧情報という2つの種類に分けているが、新旧情報の分類の基準は研究者によって違う (Prince 1981)。たとえば、その情報が復元できる情報かどうか (Halliday and Hasan 1976, 久野 1982)、談話において現れている情報かどうか (Chafe 1976)、聞き手が知っている話し手が想定した情報かどうか (Clark and Haviland 1977) という様々な観点から扱うことができる。また、新情報なのか旧情報なのかをはっきりと判断できない場

合もある。Prince (1981)は情報の新旧の概念や分類を明確にしようとし、従来の二項対立的な分類の代わりに、複合的な分類を提案している。本論文では、この複合的な分類をもとに分析するため、2節でPrince (1981, 1992)の研究について述べ、3節で本論文が用いるそれぞれの種類の判断基準を説明する。そして、4節では本論文の調査方法を説明する。本調査で得た、テキストにおける省略・指示表現・代名詞の利用や、文の主題・項の選択という現象が、情報の新旧に関わっているため、5節ではそれらの現象を取り上げ、日本語における言語形式と情報の新旧の関係を見ていく。

2. Prince (1981, 1992)における情報の新旧の分類

Prince (1981)によると、テキストとは、話し手から聞き手への、ある談話モデル (discourse model) を構築させるための指示の集合である。このモデルには、登場人物・もの・ことなどを表す談話要素 (discourse entities)、談話要素の修飾である属性 (attributes)、要素間の結びつき (links) などが含まれるが、Prince (1981)は談話要素から情報の新旧の分類を考えている。全ての談話要素が名詞句の形で現れているが、全ての名詞句が談話要素であるわけではないと指摘している。

また、Prince (1981, 1992)はClark and Haviland (1977)の概念に基づき、情報の新旧を、「聞き手が知らない/知っている/推論できる」と話し手によって想定される情報なのかという「話し手の想定」の観点から捉えて分類を検討している。結果として「最新 (brand-new)」「未使用 (unused)」「推論可能 (inferable)」「喚起済み (evoked)」という種類が提案されている。

- (1) a. A guy I work with says he knows your sister. (Prince 1981: 233)
 b. He passed by the Bastille and the door was painted purple. (Prince 1992: 305)

「最新」は、(1a)の「A guy I work with」のように、発話時点で初めて談話モデルに導入される情報であり、聞き手がまだ知らないと話し手が想定する情報である。一方、「喚起済み」はすでに聞き手の談話モデルにあるため、聞き手が知っていると想定される情報である。それには(1a)の「he」が当てはまる。「未使用」は、(1b)の「the Bastille」のように、聞き手の談話モデルに初めて導入されるものではあるが、それがどのようなものかすぐに頭の中に取り込める情報である。また、「推論可能」は、(1b)の「the door」のように、バステュー牢獄にはドアがあると、聞き手が前に現れた談話要素から推論できると考えられ、何のドアかを明示的に説明しなくても、聞き手が

知っていると話し手が想定する情報である。なお、Prince (1981)における分類は、「リンク付き・なしの最新」、「内容から推論可能」、「テキスト・状況による喚起済み」などの下位分類があるが、それらは現れた形や場面が違っているのみであり、上位分類と概念が同じであるため、ここでは扱わない。

Prince (1992)は、ある要素の情報の新旧を決めるには、聞き手の知識の新旧、あるいは、談話モデルにおける新旧によると結論した。上記で述べた種類を聞き手のステータスと談話のステータスの観点でまとめると、次の表1の通りになる。「推論可能」は、形としては聞き手・新/談話・新のようであるが、聞き手が知っていると話し手が想定し、前の要素が引き金でその存在があるため、聞き手・旧/談話・旧として扱っても良いと述べている。

表1 Prince(1992)の聞き手と談話のステータスによる分類

| | 談話・新 | 談話・旧 |
|-------|------|------|
| 聞き手・新 | 最新 | - |
| 聞き手・旧 | 未使用 | 喚起済み |

本論文はPrince (1981, 1992)と同じく、情報の新旧の概念を、受け手が持つ知識に関する送り手の想定として捉える。これは、送り手が、伝えたいことが上手く伝わるように、談話で用いる要素を受け手が知っているか知らないかと想定しながら、表現を選択して談話を作っていくと考えられるからである。また、テキストに現れた要素は新情報・旧情報を判断しにくい要素が存在するため、より細分化されるPrince (1981, 1992) の分類も参考にし、「最新」「未使用」「推論可能」「喚起済み」という種類を用いて分析していく。

3. 本論文で用いる情報の新旧の判断基準

本論文では情報の新旧を送り手の想定から検討すると述べたが、私たちはただ第三者として談話を観察することができるのみで、送り手が実際はどう想定していたかはわからない。しかし、その談話に現れた言語形式から送り手の考え方を把握することができるのではないかと考えられる。送り手がある要素を情報のどの種類として扱っているかを決めるにあたって、本論文では次のような判断基準を用いる。

- (2) a. うちの猫のももちゃんはね、簡単に人になつかないんだ。
- b. ももちゃんはね、最近あまり何も食べなくて、困っている。

c. うちの猫はいつも舌を出したまま寝る。

d. 最近猫を飼い始めたけど、その猫は昨日から行方不明になっているんだ。

まず、「最新」は(2a)の「ももちゃん」のように、初めて談話モデルに導入され、発話時点で聞き手が知らない、あるいは、特定できないと想定される情報である。英語の場合は「a, an」の不定冠詞から判断されることが多いが、日本語ではこのような要素がないため、「最新」かどうかを判断するにはかなり困難である。しかし、その要素を説明/特定するための内容が現れたら、その要素は受け手が知らないと送り手が想定したと判断できるため、そのような内容がある要素は「最新」として扱う。(2a)では「うちの猫」がその説明の内容に該当する。一方、(2b)の「ももちゃん」は何かを説明するような内容がなく、送り手は受け手が知っている情報として扱っていると判断できるため、これは「未使用」とする。「未使用」は「最新」と同じく、談話モデルに初めて導入されたが、発話時点で受け手がすぐそれを指すことができる情報である。

「推論可能」は、談話モデルにおいて初めて現れたが、前に現れた要素からその存在が推論できる情報である。たとえば(2c)の「舌」のようなものである。この場合、猫は舌があると推論できるため、詳しく説明しなくてもそれはその猫の舌を指していると理解することができる。最後に、「喚起済み」はすでに談話モデルにおいて現れているため、聞き手が知っているとして想定される情報である。これは(2d)の下線付きの「猫」のように、談話において2回目以上言及された要素とする。

4. パラフレーズ調査によるテキストについて

分析に用いるテキストは、2018年10月から12月にかけて実施したパラフレーズ調査によって得たテキストである。その調査方法はベケシュ(1987)の「単文モードから複文モードへのパラフレーズ調査」をもとにした方法であり、これは、被調査者にくつつかの情報を単文の形で提示し、それらの単文を用いて複文も含まれる自然なテキストを書いてもらうという方法である。被調査者に提示した、単文によるテキストを「入力テキスト」と、被調査者が作成したテキストを「出力テキスト」と呼ぶ。また、入力テキストの文を「最短文」と呼ぶ。以下に示した通り、用いた入力テキストは、最短文が15ある説明的なテキストである。この入力テキストを提示し、「次の情報をすべて使って、動物の生態を説明する自然な日本語の文章を作りなさい」という指示をした。調査対象は日本語母語話者36人、外国人日本語学習者17人であったが、本論文では日本語母語話者の結果のみを用いる。

入力テキスト

- ① シロナガスクジラは世界最大の動物である。
- ② シロナガスクジラは最大で体長が34メートルになる。
- ③ シロナガスクジラは体重が190トンになる。
- ④ シロナガスクジラほど重い動物は見つかっていない。
- ⑤ シロナガスクジラは無敵と思える。
- ⑥ シロナガスクジラを襲う動物がいる。
- ⑦ シャチはシロナガスクジラを襲う。
- ⑧ シャチはキラール・ホエール(殺し屋クジラ)ともよばれる。
- ⑨ シャチは鋭い歯を持つ。
- ⑩ シャチは魚やオットセイなどを追い回す。
- ⑪ シャチは魚やオットセイなどをとらえる。
- ⑫ シャチは優秀なハンターである。
- ⑬ シロナガスクジラは泳ぎが速い。
- ⑭ シャチは集団で獲物を襲う。
- ⑮ シャチはシロナガスクジラをさらに上回るスピードで取り囲む。

この調査方法により、最初に提示した入力テキストとその後作成された出力テキストの形式を比べることで、被調査者がどのようにそれぞれの情報を用いてテキストに作成するかを観察することができる。また、被調査者が同じく制限された情報を持つため、言語化された後に、何らかの言語現象が発生した場合にも、その傾向を観察することができる。

5. 分析と考察

作成された出力テキストを見ると、被調査者が入力テキストにある形式を変えて出力テキストを作成していることがあった。そして、その中には、入力テキストの最短文内にある要素が省略される場合、指示表現や人称代名詞という入力テキストにないものが用いられる場合があった。また、入力テキストの最短文内の要素が主題化されたり、文構造が変更されたりすることも観察される。これらの現象は情報の新旧から影響を受けていると考えられるため、本節ではそれぞれの現象と情報の新旧の関連を分析して考察する。

5-1. 省略現象

下記の(3)は日本語母語話者J14の出力テキストの冒頭である。この例の第二文と第三文を見ると、入力テキストの最短文には「シロナガスクジラは」という主題があるが、出力テキストに書かれたとき、それが省略されたことがわかる。本調査の出力テキストに見られる省略現象は、主題の他に、入力テキストで反復される述語(最短文②と③の「になる」)や目的語(最短文⑩と⑪の「魚やオットセイなど」)などにも見られる。

- (3) シロナガスクジラは世界最大の動物である。＜○は＞最大で体長が34メートルで、＜○は＞体重が190トンにもなる。これほど重い動物は見つかっておらず、＜○は＞無敵とも思えるが、シロナガスクジラを襲う動物がいる。

(J14:①。②③。④⑤⑥。) ²

上記の(3)の第一文の「シロナガスクジラ」は初めて談話モデルに導入されており、その後にシロナガスクジラを説明するための内容があるため、「最新」とする。次の第二文は「シロナガスクジラ」が「喚起済み」として現れるはずだったが、それが省略されている。全ての出力テキストを見ると、主題の「シロナガスクジラは」は、最短文②で72%省略され、最短文③では89%されていた。第二文以降の「シロナガスクジラは」が省略される場合も見られる。それは、「喚起済み」の要素であるため、省略することができるのである。久野(1982)によると、省略される要素は「言語的、或いは非言語的文脈から復元可能でなければならない」と述べている(p. 121)。復元可能な要素は、すでに受け手の談話モデルに現れている必要があると考えられるため、省略現象は既出の特性を持つ「喚起済み」に限られる現象だと言える。

しかし、「喚起済み」であれば全てが省略できるわけではない。(4)において2回目に現れた「シャチ」は「喚起済み」であるが、省略されていない。この例と同じく、すぐ次の文に現れた「シャチ」が省略されない出力テキストは約92%であり、非常に高かった。なぜこの「シャチ」が省略されない傾向にあるかというと、それはこの文以降シロナガスクジラについての話が一旦終わり、シャチについての話が語られるようになるためである。ここで「シャチ」を主題として明示的に表さなければ、その文の後はまだシロナガスクジラの話が続いていると思われる可能性があるのである。

- (4) しかし、そのシロナガスクジラを襲う動物がいる。それはシャチだ。シャチはキラー・ホエール(殺し屋クジラ)ともよばれ、鋭い歯を持つ。

(J1:⑥。⑦。⑧⑨。)

以上、テキスト内の談話要素が「喚起済み」である場合、その要素は省略することができるが、主題である要素の省略については、主題の転換という他の要因もその要素の省略・非省略に関わっていることがわかる。

5-2. 指示表現の利用

出力テキストに現れた指示表現は、指示代名詞と指示連体詞の2つの種類がある。まず、指示代名詞の利用には、(5)の「これ」がいずれも「シロナガスクジラ」という名詞を、「それ」が「シロナガスクジラを襲う動物」という名詞句を参照していることなどが見られる。このような指示代名詞は、「喚起済み」である要素にのみ見られる。

- (5) シロナガスクジラは、最大で体長が34メートルにもなる世界最大の動物だ。体重は190トンにもなり、これほど重い動物は見つかっていない。この様に、シロナガスクジラは無敵と思えるが、これを襲う動物がいる。それは、キラー・ホエール(殺し屋クジラ)とも呼ばれるシャチだ。

(J27: ②①。③④。⑤⑥。⑧⑦。)

次に、指示連体詞についてだが、その使われ方は(6)と(7)に見て取れる。(6)の「そんな」は「喚起済み」である「シロナガスクジラ」と現れる一方、(6)の「その」と(7)の「その」は、「推論可能」である「鋭い歯」「体長」と現れている。

- (6) 現在シロナガスクジラほど重い動物は見つかっておらず、一見無敵の動物に思える。しかし、そんなシロナガスクジラを襲う動物がいる。シャチである。シャチはキラー・ホエール(殺し屋クジラ)ともよばれ、シロナガスクジラを襲う。シャチは優秀なハンターであり、その鋭い歯で魚やオットセイなどを追い回し、とらえる。(J28: ④⑤。⑥。△。⑧⑦。⑫⑨⑩⑪。)

- (7) シロナガスクジラは世界最大の動物だと言われています。その体長は最大で34メートル、体重は190トンにもなります。(J12: ①。②③。)

以上のことから、指示代名詞は「喚起済み」に用いられるが、指示連体詞は「推論可能」にも用いられることがわかる。指示代名詞はある要素の代わりに用いられるものであるため、その要素は読み手が知っていて談話モデルにすでに存在している必要があるのである。一方、指示連体詞は結びつけられた要素が前に現れた要素と関係があることを表すため、まだ談話において現れていない要素であっても、先行文脈とつながっている要素であれば用いられると考えられる。そのため、指示連体詞は「推論可能」と「喚起済み」のいずれにも利用可能である。

5-3. 人称代名詞の利用

出力テキストでは「彼ら」という人称代名詞が「シロナガスクジラ」と「シャチ」の代わりに用いられる場合がある。次の(8)と(9)の通りである。

- (8) 無敵に思えるシロナガスクジラだが、彼らを襲う動物がいる。シャチである。
 (J4:⑤⑥。⑦。)
- (9) シャチは、シロナガスクジラをさらに上回るスピードで取り囲み、とらえる。
彼らはキラー・ホエール(殺し屋クジラ)とも呼ばれている。(J8:⑮。⑧。)

人称代名詞の利用数は7回しかなく、指示代名詞に比べて少なかった。3人称を表すのに指示代名詞を利用することが多いのは、日本語の特徴だと言われ(神崎 1994: 47)、本調査の結果からもその傾向が見られる。人称代名詞は、省略と指示代名詞と同じく、利用された要素は「喚起済み」である。人称代名詞も談話モデルにすでに存在する要素にのみ利用可能だとわかる。

5-4. 談話要素の主題化

本調査の結果、入力テキストにおいて主題ではない要素が、出力テキストにおいては主題として現れるという現象が観察された。5-1節では主題に見られる省略現象について触れたが、本論文で扱う主題というのは、英語のThemeに相当するものであり、その文で何について述べようとしているかを表す部分である。その主題に対して説明する部分を題述Rhemeと呼ぶ。主題は通常文頭に位置し、日本語の場合は、助詞「は」がその要素が主題であることを示す標識である(神崎 1994: 171)。主題は旧情報を担い、題述は新情報を担うことが多い(福地2011: 51)とされるが、本調査の出力テキストにおいても主題になった要素の多くの場合は、典型的な旧情報に相当する「喚起済み」の要素である。ただし、(10)を見ると、「推論可能」である「体長」と「体重」が主題として現れている。これらの要素は、入力テキストにおいては題述の部分にあるが、出力テキストにおいては、「シロナガスクジラは」という主題が省略され、「体長」と「体重」が主題化されたわけである。全ての出力テキストを見ると、出力テキストにおいて主題として現れる場合は、最短文②の「体長」が42%、最短文③の「体重」は約69%と、いずれもある程度高かった。

- (10) シロナガスクジラは世界最大の動物で、体長は最大で34メートルにもなる。
体重は190トンもあり、シロナガスクジラほど重い動物は見つかっていない。(J33:①②。③④。)

この主題化の現象から、「推論可能」も主題として用いられるとわかる。これは「推論可能」が前の文脈とつながっている性質を持つためである。特に先行要素の所有を表す場合には、それがその先行要素の一部だと推論できるため、「喚起済み」と同じく読み手が知っていると想定される。そのため、既知の情報の位置である主題に現れることができるのである。「推論可能」が「喚起済み」と同じく主題に現れることができると指摘した研究はBirner & Ward(1998)やBirner(2006)などがある。

5-5. 項構造の変換

これまで説明してきた現象は、「推論可能」と「喚起済み」に関わっているが、本節では「最新」の要素に見られる現象について述べる。シャチが初めてテキストにおいて現れた部分は、(11)のように、最短文⑦「シャチはシロナガスクジラを襲う。」が、出力テキストにおいて「それはシャチだ」という形で現れている。(12)では「それは」が省略され、「シャチだ」のみが現れた。

- (11) 無敵と思えるシロナガスクジラだが、そのシロナガスクジラを襲う動物がいる。それはシャチだ。シャチはキラー・ホエール(殺し屋クジラ)ともよばれる。(J13:⑤⑥。⑦。⑧。)
- (12) これほど重い動物は見つかっていないため、シロナガスクジラは無敵だと思われるが、それを襲う動物がいる。シャチである。シャチはキラー・ホエール(殺し屋クジラ)とも呼ばれ鋭い歯を持つ。(J9:④⑤⑥。⑦。⑧⑨。)

全ての出力テキストを見ると、シャチが初めて導入されたときに、(11)と(12)のように「それはシャチだ/シャチだ」という形で現れる場合は94%を占め、非常に多かった。他には、(13)のような「シロナガスクジラを襲うシャチという動物が存在する」という形と、例(14)のような「シャチはこのシロナガスクジラを襲う」という最短文⑦がそのまま現れた形があったが、それぞれ約3%に過ぎなかった。

- (13) これらのことから、シロナガスクジラは無敵だと思えるが、実はそんなシロナガスクジラを襲ってしまうシャチという動物が存在する。シャチは別名キラー・ホエール(殺し屋クジラ)とも呼ばれ、鋭い歯を持つという特徴がある。(J22:⑤⑥⑦。⑧⑨。)
- (14) これほど重い動物は見つかっておらず、無敵と思える。しかし、キラー・ホエール(殺し屋クジラ)ともよばれるシャチはこのシロナガスクジラを襲う。シャチは鋭い歯を持ち、魚やオットセイなどを追い回して、とらえる優秀な

ハンターである。(J11:④⑤。⑧⑦。⑨⑩⑪⑫。)

以上から、「最新」である「シャチ」は、他動詞文の動作主として現れるより、「NはNです」という構文の述語の部分として現れる傾向にあることがわかる。このような項構造と情報の新旧の関係について述べた研究にDu Bois (1987, 2003)がある。Du Bois (1987, 2003)は、話し手は特定の統語的パターンを好んで用いており、談話には「選好項構造(Preferred Argument Structure)」が存在すると述べている。この選好項構造には、一つの節に一つ以上の新しい項(新情報の項)を用いることを避けるという「単一新情報項制約」と、新しいものを導入するときにそれを他動詞の動作主として表すことを避けるという「旧情報動作主制約」があるとしている。本論文において、初めて言及された「シャチ」が他動詞文の動作主として現れていないことは、この旧情報動作主制約を裏付けると言える。しかし、Du Bois (1987, 2003)は新情報を談話において初めて導入されたものとしており、受け手の知識に関する点には触れていない。この新情報は、本論文の「最新」「未使用」「推論可能」のいずれにも当てはまることができる。そのため、項構造に関連する現象は、「最新」の他に、「未使用」や「推論可能」にも見られる可能性があるが、さらなる研究が必要である。

以上、テキストにおいて重要性の高い「最新」は、他動詞文の動作主として現れないことを示した。なぜ「最新」がこのように限定された形式として現れるのだろうか。それは、「最新」が初めて現れていて読み手がまだ知らない情報であるため、それが注目されるように、焦点である位置などで表した方が理解しやすいではないかと考えられる。主題または主語として現れたならば、その要素は注目されにくくなるだろう。

6. まとめ

本論文のパラフレーズ調査では、被調査者にインプットした情報の形式と、テキストとしてアウトプットされたときの形式に違いが見られた。その違いに着目して、日本語における省略・指示表現・人称代名詞の利用や、文の主題・項構造の選択のような現象と、情報の新旧との関連を観察した。談話モデルにおいて既出である情報は、省略現象、指示代名詞、人称代名詞の利用が可能になり、そして、談話モデルに既出した要素と結びつくことは、指示連体詞の利用につながっている。また、初めてテキストに言及される情報であっても、前の要素とつながってその存在が推論できる要素は既知扱いとされ、主題として現れることができる。そして、初めて導入されて読み手がまだ知らない情報については、それが着目されるように、限定される形式で現れる

傾向にあることが、項構造の変換からわかる。このように、情報の新旧ステータスがテキスト作成時の表現の選択に影響していることが明確になった。

また、本論文は聞き手と談話のステータスによるPrince (1981, 1992)の分類をもとに分析を行ったが、分析の結果から、それらのステータス以外にも、談話モデルにすでに現れた要素と結びつきがあるか否かという点も言語現象につながると見られる。そのため、先行文脈との結びつきの有無も情報の新旧を分類するための基準として用いるべきではないかと考える。これはBirner (2006)で推論的結びつき (inferential link)と呼ばれているもので、「推論可能」の性質を明確にする基準だとされている。

本論文は情報構造の一つである情報の新旧を取り上げて分析したが、言語形式に影響する要因は他にも考えられる。そのため、今後は情報構造のその他の要因について触れ、テキスト作成と情報構造の関連をさらに深く分析していきたい。

注

1. 本論文で用いる「話し手/聞き手」「書き手/読み手」と同義であり、これを「送り手/受け手」という意味として扱う。
2. Jは日本語母語話者、数字はその被調査者の番号を表す。「:」の後の番号は、4節に記載した入力テキストの最短文の番号を、用いられた順番通りに表す。黒塗りの番号は、その最短文が次の最短文内の要素の連体修飾要素として現れたことを示し、「△」の記号は、その文が入力テキストにない文であるということを示す。

参考文献

- ベケシュ, アンドレイ (1987)『テキストとシンタクス ―日本語におけるコヒージョンの実験的研究―』くろしお出版.
- Birner, B.J. (2006) Inferential relations and noncanonical word order. In B. Birner, and G. Ward, eds., *Drawing the Boundaries of Meaning: Neo-Gricean studies in pragmatics and semantics in honor of Laurence R. Horn*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 31-51.
- Birner, B.J. and G. Ward. (1998) *Information Status and Noncanonical Word Order in English*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Chafe, W.L. (1976) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In C. Li, ed., *Subject and Topic*. New York: Academic Press, pp. 25-55.
- Clark and Haviland (1977) Comprehension and the given-new contract. In R. Freedle, ed., *Discourse Production and Comprehension*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 1-40.
- Du Bois, J.W. (1987) The discourse basis of ergativity. *Language*, 63(4), pp. 805-855.
- Du Bois, J.W. (2003) Argument structure: Grammar in use. In J. W. Du Bois, L. E. Kumpf, W. J. Ashby, eds., *Preferred argument structure: Grammar as architecture for function*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins, pp. 11-60.
- 福地肇 (2011)『談話の構造』大修館書店.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- 神崎高明 (1994)『日英語代名詞の研究』研究社出版.

久野暉(1982)「談話の構造一日・英語」『講座日本語学12 外国語との対照III』明治書院, pp. 120-154.

Prince, E.F. (1981) Toward a taxonomy of given/new information. In P. Cole, ed., *Radical pragmatics*. New York: Academic Press, pp. 223-255.

Prince, E.F. (1992) The ZPG letter: Subjects, Definiteness, and Information-status. In S. Thompson and W. Man, eds., *Discourse Description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 295-325.